

一般社団法人 JA共済総合研究所
専務理事

ふくしま きろう
福 島 喜 郎



地震によって発生した大津波がいきなり街を飲み込み、すべてを一瞬で消滅させ、幾多の人命を奪った3.11東日本大震災から3年が経過した。

被災地は復興に向けて、新たな街づくりに取り組んでいる。しかし、防潮堤が建設され、被災者が仮設住宅を出て新たな住宅に住み、農業、漁業が復活し、それにより商業が活発になるまでには、後どれくらいの年月が必要になるのだろう。放射性物質により復興が遅れている福島の街の再建は、どのように進められていくのだろうか。

この千年に一度の大災害といわれる3.11東日本大震災が発生して以降、それに匹敵する、いやそれ以上かもしれないと思われる巨大災害、南海トラフ巨大地震、首都圏直下型地震や富士山の噴火がいつ発生してもおかしくない、相当に切迫した現実であるというこ

とがより切実に明らかとなってきた。

地震大国と言われるこの国で暮らしていく以上、自然の恵みと脅威を改めて認識した転換点にしなければならない。

半年後に見たもの思ったこと

大震災の半年後、三陸の沿岸部に車を走らせ、亘理、岩沼、名取、石巻、女川、南三陸、気仙沼、陸前高田を訪れた。行き交う車の大半はがれきを運ぶダンプカーであり、壊れた車の集積の山があり、海岸線の松林は根こそぎ倒れ、田園は地盤沈下して至る所で池の様相を呈していた。

海岸に近く河川の河口付近で平坦で広く、住宅地も多い、名取閑上地区、石巻、陸前高田の光景は、大規模な土砂採集場のようであり、むき出しになった住宅の基礎のコンクリートやコンクリート造りの病院、学校などがここで人々が生活をしていたと思わせる痕跡であった。

女川の海拔十数メートルと思われる高さにある地域医療センターに上り、真っ先に目に入ったものは引き波で海側に倒れたとビルであった。そしてすぐに思ったことは、この高さにある地域医療センターにまで襲ったという津波の恐怖であった。水位とか高さとかでは意味をなさない女川湾に押し寄せた絶対量を、目線を水平に左右に動かして想像してみてもわからない。科学的な計測で量を示されても、理解できる物差しが頭の中には無い。黒々

として人や家財や船やありとあらゆるものを飲み込んだ波、その流れの勢いを目にすれば恐怖以外のなにものでもなかったに違いない。

志津川を下流に向かって走ると近づく南三陸、津波の傷跡が見えた光景はすぐに廃墟と化す。気仙沼の鹿折地区、道路はまだ整備されておらず、地盤沈下し砂利で嵩上げしてあってもぬかるむ道を走ると第18共徳丸に近づく。全長60m、300tの船が、海から750mの陸地に浮かんでいる。

南三陸から陸前高田までの行路は、小さな半島、岬が多く、そこを抜けると、破壊された小さな集落がある。繰り返し繰り返し同じ光景を見た。

震災直後の凄惨さは表面的には薄らいでいるとしても、被災地の光景は、「死」という見てはいけないものを感じさせるに余りあった。正直な所、私はこの光景にふれたことを後悔した。2万人近い尊い命が奪われたことを思わずにはいられなかった。

日常と非日常の間で頭は混乱した。「復旧」から「復興」へ、「単なる復興」ではなく「未来に向けた創造的復興」へという言葉の陰には、多くの犠牲者がいて、悲しむ家族がいる。誰しも死を避けられないとわかっていても、死は人を悲しませる。時に生きていく希望すら失わせる。この大震災で亡くなった2万人近い犠牲者や被災者にどう向かい合い、どう心で折り合いをつければいいのだろうか、と思い続けた。

心の整理

京都大学教授の佐伯啓思氏の著作『反・幸

福論』を読んで、心の整理が行えた。

一つには、この大震災は、被災者も非被災者も包み込んだ共通の経験であり、また、被災者も非被災者もなく、両者は重なり合っているということである。

以下、引用すると、

『「生き残ったもの」と「死んだもの」の間にある偶然の境界は厳然と残る。「被災者」と「非被災者」との間でも同じことがいえま。だが、偶然とって片づけるには、あまりに境遇が違いすぎるのです。被災地からへだたったものは、テレビ映像を見て被災者や被災地に思いをはせる。こちらにいる「非被災者」が向こうにいる「被災者」に思いをはせている。

ここにはどうしようもない“ある断層”があります。あのような経験を「こちら側」にいるものが多少は想像できても、それは想像にすぎず、「経験」とはまったく違っている。

しかしその上で次のように考えることはできる。被災していないのも偶然に無事だっただけで運命のさじ加減で被災していたかもしれないし、津波で死んでいたかもしれない。とすれば、この大地震という未曾有の災害は、被災者も非被災者も包み込んだ共通の経験と言わねばならない、と。

テレビのこちら側にいて同情、共感したりしているが、大事なことはこちら側から相手に同情することではなく、論理的な想像力を働かせて、このような大災害を共通の経験とみるということです。ここでは、本当は被災者も非被災者もないのです。両者は重なり合っているのです。』

もう一つは、日本人固有の「死生観」や「自

然観」である。

『この大災害できわめてはっきりしていることが二つある。ひとつは、これはいかなる意味でも人間の力を超えた圧倒的な自然の力をみせつけたものだ、ということ。もうひとつは、これだけの大災害では、被災者と非被災者、さらには、肉親を失ったものとそうでないもの、もっといえば生者と死者の間にはどうしようもない断絶ができてしまうということです。』

この二つのことは、いかなる意味でも良い悪いの問題ではなく、そのものとして受け入れなければならない。と同時にそれは容易には受け入れがたいことでもあるのです。』

『今回の地震は、科学や技術や人間の意志ではどうにもならない圧倒的な威力を見せつけました。命も財産もそして築き上げてきた幸福もすべて自然の威力の前には意味をもたないのです。人間がその存在をいっきに否定されること、そこにこの大災害の意味があるのです。』

『この理不尽で徹底的な「無意味さ」から人を救い出すのは「宗教的なもの」、この現生にあって、今ここで生き、生活しながらも、現生・世俗を超えた「何ものか」を感受すること、私の場合、「死」というものが指し示す「無」にほかならない。』

佐伯氏の言葉を借りるなら、もともと、日本人のもつ死生観は、近代的な人権思想と結びついた「生命尊重主義」とは大いに異なり、死や無常の観念に発するものであった。また、その自然観は、近代主義的な、人が合理的支配によって自然を支配するという種類のものではなく、自然はとてつもない脅威であ

ると同時に、人を生かす恵みの源泉でもあった。人はいずれにせよ、自然のなかで自然とともに生きるほかないのである。そして、その自然を前提にして、人々が「共に生きる」社会の形も組み立てられてくる。

巨大災害の世紀

昨年3月に当研究所では「巨大自然災害と地域社会の防災・減災～巨大災害の世紀における自助・共助・公助～」をテーマにセミナーを開催し、京都大学大学院の鎌田浩毅教授と山梨大学大学院の鈴木猛康教授にご講演をいただいた。記憶にとどめたい。

「2011年3月11日に起きた東日本大震災は、まだ終わっていない。むしろ私たち地球科学者は、3.11をきっかけとして1000年ぶりの大地動乱が始まったととらえている。私たちはこの先、『海の地震』『陸の地震』『火山の噴火』、そして西暦2030年代に起こるであろうと予測されている『西日本大震災』を視野に入れた対策・準備を行っていく必要がある。

地球科学における『長尺の目』で見ると、自然災害は私たちに大きな被害をもたらす一方で、多くの恵みを与えてもくれている。そして、100年、1000年おきに繰り返される自然災害に遭いながらも、私たちの祖先は絶滅することなく生き延びてきたという長い歴史がある。大切なことは、日本列島の住人としては、自然災害を当たり前のこととして受け止めること。その上で、『いかに自分たちの身を守っていくか』を考えていくことだろう。」(鎌田教授)

「人間というのは、嫌なことや辛いことは

早く忘れるようにできている。しかし、巨大災害に立ち向かうためには、これまでの災害から得た教訓をきちんと活かす努力をしていかなければならない。

我が国の防災には、危機管理体制、災害情報の共有、救援物資など、たくさんの課題がある。また、山梨県をはじめ、災害時に孤立集落になる地域が日本にはたくさん存在する。各地域において災害に備えた日頃の準備と対策を、本気で考えていってほしい。

私はさまざまなプロジェクトを通じて、地域防災力を高めることの必要性、そして災害情報の共有の大切さを地域社会に広めているが、地域防災力の基本はコミュニティの連帯力だと考えている。地域のコミュニティがあれば、それは大きな防災力になる。ぜひJAでも「災害」を意識したコミュニティの連携を高め、地域を支援する体制づくりに励んでいただきたい。」(鈴木教授)

巨大災害は必ず発生する。これまでに得た災害の教訓を活かす努力をし、それぞれの地域にとっての対策と準備を、本気で考え進めなければならない。まず、命を守る。命をつなぐ。そして、復旧、復興となり、次に新たな街づくりに入る。これまでに得た教訓、最大のものとは3.11東日本大災害に他ならない。それゆえに、「共通の経験」として、「両者は重なり合う」ものとして、風化させずに活かしていかなければならない。

南海トラフ巨大地震

2030年代に起こるであろうと予測されている「西日本大震災」、つまり南海トラフ巨大

地震(南海、東南海、東海地震の三連動)では、東日本大震災と同じような最大震度7レベル、最大34mの津波、津波到達は紀伊半島先端では2分、地震の規模を示すマグニチュードは、東日本大震災のM9.0に対しM9.1が予測されている。

内閣府が公開した被害想定は、最大で東日本大震災の十数倍となるが、防災対策を推進することによる被害軽減効果も推計している。すでに各自治体は取組みを始め、沿岸地域では大津波から命を守る津波避難塔の建設が始まっている。

また、災害後の復興を妨げる震災がれきについて、環境省は、最大で東日本大震災で生じた量の11倍に上るとの推計を発表した。全国で広域処理をしても、焼却・埋め立てを終えるには19年以上かかる見込みとしている。絶望的な量である。がれき処理と並行し生活復興や街づくりなどを3.11東日本大震災の復興、復興の過程から学び工夫していかなければならないであろう。

災害を忘れない

日々の暮らしの中にも、危険は潜んでいる。その危険がどういうものかを知り、向き合っている。同じく、災害とはどういうものかを知り、自ら向き合っている生きていかなければならない。

特に今は、3.11の被災地を思い、どう復興していくのかを見守り続けながら、災害を忘れないようにしなければならない。